

# 2022 年度 FD 活動の取組み

## 1. FD 研修会

### 2021 年度特色ある授業の事例紹介

講師:山崎秀雄(経済学部 教授)・直井一博(人文学部 教授)

司会:矢田部圭介(FD 委員、社会学部教授)

日時:2022 年 11 月 24 日(木) 15:20~16:20

形式:ZOOM によるオンライン開催

#### 〈趣旨と概要〉

新型コロナウイルス禍が続き、オンラインを活用した授業が常態化してきている。こうしたなかで、仕方なくではなく、オンラインを授業のなかで積極的に活用し、活かしていく試みが必要とされている。こうした問題意識のもと、本年度の FD 研修会では、2021 年度の『FD 報告書』の「特色ある授業」で、オンラインでの工夫も含めて、興味深い取り組みを紹介してくださった、お二人の先生に講師をお願いした。お二人の授業の工夫を、より詳細に、質疑応答も含めて、広く紹介して、本学教員の授業への取り組みのヒントとしてもらうためである。

研修会は、ZOOM によるオンライン形式で、それぞれの先生の 20 分の講演のあとに質疑応答を行うかたちで実施された。それぞれの先生が授業のなかで実際に用いた資料なども紹介され、工夫の苦労と成果とが伝わる、具体的な内容の講演となった。参加者に対して、授業への意欲を点火し、自分なりの工夫を触発する、たいへん貴重な機会となったと思われる。

#### 〈内容〉

山崎秀雄教授は、「ジグソー・メソッドとワールドカフェのミックス」による、アクティブ・ラーニングの要素を取り入れた、経営学の対面ゼミにおける輪読の方法をまず紹介された。複数のグループに分かれて、それぞれのレポーターがテキストを報告し、レポーター以外の参加者がその報告をホワイトボードにまとめ、その後、レポーターがグループを移動して、質疑応答を受ける。これを複数回繰り返すことで、レポーター以外の学生の参加と理解を深める手法である。そのうえで、山崎教授は、新型コロナウイルス禍で、このゼミの運営方法を、Zoom のブレイクアウトルームと Google のスプレッドシートを用いて「リモートで再現」する工夫を紹介された。

オンラインでは「学生間の距離が縮まり(を教員が認識し)にくい」という課題が残ると述べられたが、オンラインの工夫だけでなく、対面ゼミでの工夫それ自体が、参加者に非常に参考になった講演だったと思われる。

直井一博教授は、新型コロナウイルス禍の下でのオンラインによる英語の授業で、学生のモチベーションを持ち上げる工夫として、授業内での短編英語動画の紹介を始めたことからひろがった取り組みを紹介された。最初は、直井教授が、Facebook にアップされている英語の映画クリップを授業内で紹介するところから始まった。YouTube や Instagram にも対象を広げ、「報告シート」(「聞き取れた英語表現」、「タイトルをつけるとしたら」などのアンケート形式)を作成して、授業外の隙間時間に自由に観てほしいと呼びかけ、さらに、動画視聴を授業の一環として、動画視聴報告を平常点と読み替えるという措置をとったところ、履修学生の動画視聴が非常に積極的になり、動画視聴報告が学期中に 1000 を超えるクラスまで発生するようになったとのことだった。

実際にクラス内で視聴された動画そのものや履修学生の動画視聴報告の一部も紹介され、オンラインを活用した授業外の取り組みが、学生の英語力の血肉になっていることが非常によく分かる講演だったと思われる。

〈参加者からの声〉

研修会終了後、アンケートの記述欄には、以下のような意見が寄せられた。

- 共有財産になると思います。
- 専門分野が違うため、そのまま使うということはできなさそうだったが、ほかの先生方がなさっている授業の一端をご教示いただけただことは勉強になった。
- 自分の行っている講義・演習に直接つながるものではないが、活用法を考えてみるきっかけとなった。
- 授業の形態や目的によって応用しにくいこともありますが、私の授業でも活用できそうなノウハウをご紹介いただきました。
- 学生を参加させる方法や学生のモチベーションを高める方法に気がついた。
- とくに初年度教育などを含めて、いろいろと参考になった取り組みを応用したいと思った。
- ゼミの輪読はやったことがないので工夫のある輪読の方法が学べてよかった。来年の自分のゼミでも取り入れられるか検討したい。

このように、かりに直接そのまま使える手法ではなかったとしても、自分の授業での活用方法を考えることをとおして、自分の授業を振り返り、検討し直すきっかけになったように思われる。

また、アンケートの研修内容の満足度を尋ねる設問の回答結果は、以下のとおり、「非常に参考になった」と「参考になった」を合計すると90%を超えたこともつけ加えたい。各々の教員の授業内での具体的な取り組みを可視化し共有することの意義が分かる研修会だったと思われる。

## 2022 年度 FD 研修会受講者アンケート結果

### 本日の研修内容の感想をお聞かせください

非常に参考になった	49	45.0%
参考になった	52	47.7%
どちらとも言えない	8	7.3%
参考にならなかった	0	0.0%
まったく参考にならなかった	0	0.0%
合計	109	100%

(文責: 矢田部圭介)

## 2. FD フォーラム「学生と共に考える授業改善」

全体司会: 林 雄亮 (FD 委員長、社会学部教授)

討議司会: 小川 俊明 (FD 委員、経済学部准教授)

日時: 2022 年 12 月 15 日 (木) 17:15~18:45

場所: ZOOM によるオンライン開催

テーマ: ~武蔵大学の教育(授業)に対する改善点について~

### 〈趣旨と概要〉

武蔵大学 FD フォーラムは、テーマに基づき学生が授業改善に向けた提案を行い、それを受けて学生と教職員がともに授業改善に関して検討する企画である。FD 活動の中でも、特に学生を主体とするものであり、学生アンケート等では知ることができない生の声を受けて、教職員・学生が一体となり、課題について検討することを目的としている。本年度は、学生9名、教員 38 名、職員 15 名の計 62 名が参加して行われた。実施概要、学生からの提言(発表タイトル・テーマ)は以下の通りである。

### 1. タイムスケジュール

時間	内容
17:15 [5分]	開会挨拶 (高橋学長)
17:20 [25分]	学生からの提言 ※1 グループ5分程度
17:45 [55分]	ディスカッション (進行:小川委員)
18:40 [5分]	まとめ (林委員長)
18:45	閉会

### 2. 学生からの提言

No	学部学科	学年	氏名	発表タイトル・テーマ
1	社会学部 社会学科	4	平井 優衣 降矢 健斗	〇〇学×方法論
2	経済学部 金融学科	3	浅海 昂	学びの相互満足のために(経済学部版)
3	人文学部 英語英米文化学科	2	香川 祥太郎	大学英語教育~大学卒業後の社会へ 未来の中学生・高校生へ
4	人文学部 ヨーロッパ文化学科	2	森田 侑人	「つながる、武蔵」をめざして— —「ゼミの武蔵」の先、これからの百年のために—
5	国際教養学部 グローバルスタディーズ専攻	1	岩月 繁樹 門坂 奈桜 山本 美麗	国際教養学部の授業への提言

昨年度のフォーラムは「ゼミ」に特化したものであったのに対して、本年度のフォーラムは、より広く「授業」全般に対する改善点を議論する場となった。学生からの提言に対して、各学部長等が応答するというスタイルで討議が進んでいった。

学生からの提言としては、①105分授業の意義や履修システム(学部、学科、コース等で履修できる授業が制約されてしまう)などの制度面での提言、②課題の量や英語教育の改善など授業運営に関するもの、

また、③教員との連絡手段やシラバスの記述、フィードバックの在り方など教員・学生間のコミュニケーションに関するものが挙げられた。

一方、教員側からは、学生が望む授業スタイルについての質問や、大学や学部を超えて複数のゼミを取りたいという要望が学生にはどの程度あるのかといった質問がみられた。また、オンラインコミュニケーションに関しては、新型コロナウイルス禍において、オンライン授業がある意味強制的に進んでいる状況で、その中でベストな方法を模索し試行錯誤しているところなのではといったコメントが聞かれた。

最後に、フォーラムで議論された内容がどこまで改善されたのか(或いは未着手なのか)が(より)はっきりとフォローできるシステムを作っていくことが重要であるとの意見が共有された。

(文責:小川俊明)

### 3. 教員 FD 研修報告 (1)

#### <研修の概要>

名称:「令和4年度 FD 推進ワークショップ」  
日程:2022年8月10日(水)10:30~17:00  
開催方式:オンライン(Web会議システム Zoom)  
主催:一般社団法人 日本私立大学連盟  
参加者:佐藤宇樹

#### <研修の目的>

令和4年度 FD 推進ワークショップの目的は、模擬授業を通じ、ワークショップ参加者が教員と学生のそれぞれの立場を経験しながら、少人数のグループで意見交換を行うことで、学生の学びや企画を促進する授業運営のヒントを探ることである。

#### <主なプログラム>

- 開会・オリエンテーション(全体説明)
- グループディスカッション  
—— Zoom のブレイクアウトセッション機能を用い、各グループに分かれ、各自が授業に関して持つ悩みを共有し、その解決策を考える。
- 模擬授業・グループ内ふりかえり  
—— グループディスカッションと同一のグループにおいて、各自15分間で授業を行い、他の参加者から授業手法に関して意見をもらう。
- 全体発表  
—— グループ内ふりかえりで確認・共有された点をグループごとに発表することで、参加者全体で各グループの成果を共有する。
- 閉会・事務連絡

#### <研修で得られたこと>

令和4年度 FD 推進ワークショップ参加後の自身の教育に関する問題意識の変化や今後取り組みたいこととして次の2点があげられる。

1点目は授業支援ツールを積極的に活用し、授業内で学生と積極的にコミュニケーションをとることである。本ワークショップ内でのグループディスカッションを通して、多くの先生が、授業内でリアルタイムに学生とのコミュニケーションを図るために様々な授業支援ツールを利用していることを知ることができた。授業内における学生とのコミュニケーションを充実させることで、扱っているテーマに関する学生の理解度などを適切に把握することが可能になる。それにより、学生の理解度が低い場合には追加説明を行うことで理解度を向上させることができるなど、授業の質を大きく改善させることが可能である。授業支援ツールの中には無料で利用できるものもあるため、今後の自身の授業で、様々な授業支援ツールを積極的に導入し、授業内で学生と積極的にコミュニケーションをとるようにしていきたい。

2点目は学生が主体的に授業に参加するように授業の進め方を工夫することである。一般的に多くの授業では教員が授業内容を学生に説明する形式がとられるが、そのような授業形式において学生は受動的に授業に参加することになる。しかし、学生が授業内容を深く理解するためには主体的に授業に参加し、授業内容について様々な角度から考察することが必要不可欠である。学生が主体的に授業に参加していくための方法として、次のような授業の工夫がディスカッショングループ内で共有された。1つ目は授業内でクイズを出すなど、ゲーム性を導入し学生の授業内容への興味関心を高め、授業への積極的な参加を目

指すことである。例えば、授業の始めに〇×クイズに答えてもらい、自身の解答が正しかったか否か授業を聞きながら確認してもらい、授業後にもう一度同じクイズに答えてもらうなどである。2つ目は授業内容と学生自身がこれまで学習してきた内容や関心のある事柄がどのように関係しているのかを学生に考えてもらう時間を作ることである。大学の授業で学習する内容は抽象的であることが多いため、その内容がこれまでの学習内容とどのように関係しているのかを学生自身に主体的に考えてもらうことで、学生が抽象的な内容を具体的なものとして理解することが可能になり、授業内容を深く理解できるようになると考えられる。上であげたような工夫を今後の授業に取り入れることで、学生が主体的に授業に参加しやすくなるように自身の授業を改善していきたい。

以上

## 4. 教員 FD 研修報告 (2)

### <研修の概要>

名 称:「令和4年度FD推進ワークショップ」  
日 程:2022年8月5日(金)10:30～17:00  
開催方式:オンライン(Web 会議システム Zoom)  
主 催:一般社団法人 日本私立大学連盟  
参加者:新田万里江

### <研修の目的>

この研修会は、平成6年度から始まった FD 推進のためのワークショップだが、令和4年度の今回は、特に新型コロナウイルス禍を経て対面とオンラインを併用する授業運営が主流となると予想される大学教育の現場で、どのようにオンライン授業で得た知識や技術を活用していくかを模索することにその主眼が置かれた。特に、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業運営の方法やその実践方法についての意見交換が大きな目的となっている。また、これまでのワークショップは新任教員を主な参加者としてきたが、オンライン授業については教歴にかかわらず新しい授業形態なので、新任教員以外の教員の参加も可能とすることになった。

### <プログラム>

- 開会・オリエンテーション(全体説明)
- グループディスカッション
- 休憩
- 模擬授業・グループ内ふりかえり
- 休憩
- 全体発表
- 閉会・事務連絡

### <研修の概要>

まず、午前中のグループディスカッションでは、ファシリテーターの先生が1名と参加者の5名が一つのグループとなり Zoom のブレイクアウトルームを利用して授業の運営について話しあった。午後は同じメンバーで模擬授業とそのフィードバックを行った。報告者が参加したグループを含め7グループが同時平行で同様のセッションを行う。午前中のグループディスカッションでは、午後の模擬授業をリラックスして行うことができるように考慮されてプログラムが設計されており、自己紹介、アイスブレイキング(質問:どんな授業を目指していますか?)、皆さんと話し合いたい話題の3つのテーマに基づきディスカッションを行った。この際、Google で提供されている Jamboard というシステムを利用した。これは、オンライン上のホワイトボードのようなスペースに複数のメンバーが同時に書き込みを行うことができるツールである。この Jamboard を用いることで、参加者が一斉に意見を書き込み、それを可視化することができるので非常に便利だと感じた。これ以外にも、ディスカッションの回し方(参加者の中で、進行役や記録役を決めること、それぞれの役割の決め方)など、このディスカッションそのものがアクティブ・ラーニングの手法を使っていたため、体験しながら学ぶことができたのが大変良かった。

午後は、同じメンバーで模擬授業(一人 15 分)を行い、先生役以外の参加者は学生役を担いつつ、模擬授業終了後にフィードバック(各 10 分)を行った。この際、良かったところは7割、より工夫を要するところは3割くらいの割合でコメントをするようにという指示があった。この声かけのおかげもあって、非常に良い雰囲気の中でポジティブな側面を指摘し合うことができたのが良かったと思う。また、技術的な側面(メディアの使い方、



声かけ、導入方法、アクティビティ)でも多くの学びを得られた。全ての模擬授業終了後に、全体の振り返りを行い、模擬授業での気づきについて議論を行った。ここで指摘された3つのポイントは、その後の全体発表でグループの代表者が発表した。全体発表では、報告者が参加したグループを含め全7班のディスカッションの内容についての発表を聞き、全体の振り返りを行った。

以 上

## 5. 教務 FD

### 「武蔵型 ICT/AI 教育モデル導入に向けての取組み」

新納 卓也(全学教務委員長)

2022年度の教務FDでは、2020年度および2021年度に新型コロナウイルス感染症対策として実施したオンライン授業の成果や課題をふまえ、第四次中期計画で課題として掲げられている「武蔵型 ICT/AI 教育モデル導入」に向けて、以下の取組みを行った。

#### 1. 2024年度以降のメディア授業科目の決定

2023年度は2022年度に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大の非常時と位置づけ、感染症対策のための緊急措置としてオンラインで実施する科目については、メディア授業として扱わないこととなった。一方、2024年度は平時の体制に戻ることが想定され、オンラインで実施する授業はすべてメディア授業として扱うこととなる。メディア授業は卒業要件に含まれる単位の上限が60単位と定められているため、2022年度までとは異なり、オンラインで実施する科目を精査し、限定することが必須となる。このような状況をふまえ、2024年度以降のメディア授業科目について方針を検討し、2024年度以降もオンラインで実施する科目について各学部・パートに選定を依頼し、決定した。

方針検討にあたっては、これまでオンライン授業の実績を蓄積してきた各学部からの意見を重視した。オンデマンド授業は通常6時限に配置し定期試験実施不可としているが、定期試験期間中に教室で筆記試験の実施を希望する科目や1～5時限にライブ配信での実施を希望する科目については、1～5時限に配置することとした。また、2024年度以降にメディア授業として実施する科目については2023年度もオンライン授業を試行実施できることとし、2023年度の試行結果により、対面授業に戻ることができる余地を残した。

#### 2. 学生にPC等を持参させる授業についてのシラバスへの記載

従来からシラバスにPC等の持参・利用についての情報を記載した授業が一定数あったが、2020年度以降オンライン授業が浸透するなかで、その数はさらに増えることが予想される。しかしながらシラバスにおける記載ルールが定まっていなかったため、授業担当者によって記載箇所や内容が異なり、学生に必要な情報が伝わりにくい状況であった。

そこで情報・メディア教育センター長と連携して検討を進め、2023年度以降のシラバスにおいては、「PC等デバイスの持参」という項目を新設するとともに、記載の基本ルールを決定し、シラバス執筆依頼の際に周知した。また、本学では現在、大学に持参できるPCの準備を義務付けていないため、必修科目等でPC持参を必須とすることは回避すべきと判断し、「必須指定不可科目リスト」を作成して、シラバス執筆依頼の際にあわせて周知した。